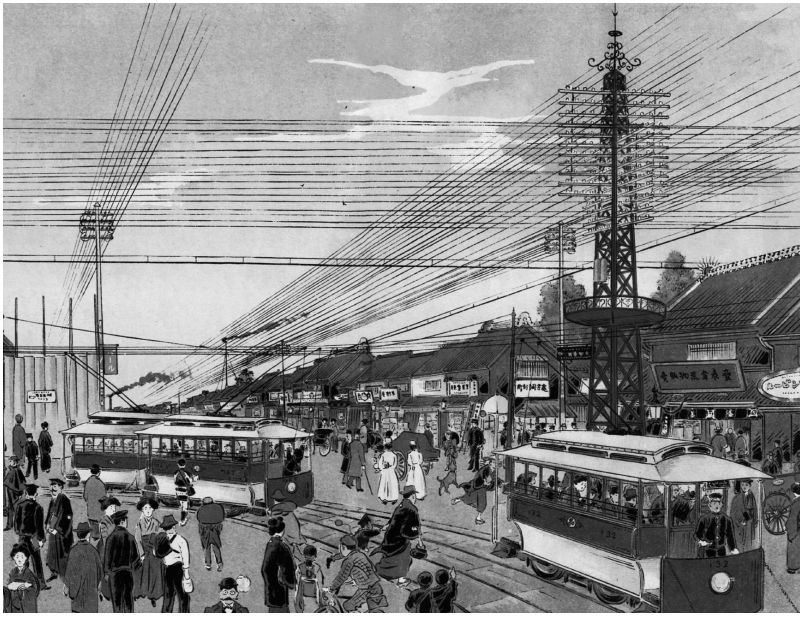


明治末年頃の本郷のようす

「よく考えたのですか。」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないというわけを強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありましたが、私はそれを忘れてしまいました。男のようにはきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合にはたいへん心持ちよく話のできる人でした。「よござんす、さしあげましょう。」と言いました。「さしあげるなんていばった口のきける境遇ではありません。どうぞもらってください。ご存じのとおり父親のない哀れな子です。」と後では向こうから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片づいてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんはなんの条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれでたくさんだと言いました。本人の意向さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私のほうが、かえって形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、

当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。[13]本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」と言いました。

自分の部屋へ帰った私は、事のあまりにわけもなく進行したのを考えて、かえって変な気持ちになりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底にはい込んできたくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は昼頃また茶の間へ出かけていって、奥さんに、今朝の話をお嬢さんにいつ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなかろうというようなことを言うのです。こうなるとなんだか私よりも相手のほうが男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き止めて、もし早いほうが希望ならば、今日でもいい、稽古から帰ってきたら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらうほうが都合がいいと答えてまた自分の部屋に帰りました。しかし黙って自分の机の前に座って、二人のこそこそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、なんだか落ち着いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子をかぶって表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。なんにも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子をとって「今お帰り。」と尋ねると、向こうではもう病気は治ったのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ治りました、治りました。」と答えて、ずんずん水道橋[12]のほうへ曲がってしまいました。

＊

12 **水道橋**　東京都文京区と千代田区の境を流れる神田川に架かる橋。またその一帯の地名。

[13]「本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」という発言からどのようなことが想像できるか。

〈拘泥〉

私は猿楽町[13]から神保町（じんぼうちょう）の通りへ出て、小川町（おがわまち）のほうへ曲がりました。私がこの界隈（かいわい）を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手*ずれのした書物などを眺める気が、どうしても起こらないのです。私は歩きながら絶えずうちのことを考えていました。私にはさっきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんがうちへ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真ん中で我*知らずふと立ち止まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。またある時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋（まんせいばし）[14]を渡って、明神[15]の坂を上がって、本郷台へ来て、それからまた菊坂[16]を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区にまたがって[17]、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKのことを考えなかったのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみてもいっこう分かりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私がうちの格子を開けて、玄関から座敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の部屋を抜けようとした瞬間でした。彼はいつものとおり机に向かって書見をしていました。彼はいつものとおり書物から目を離して、私を見ました。しかし彼はいつものとおり今帰ったのかとは言いませんでした。彼は「病気はもういいのか、医者へでも行ったのか。」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、謝りたくなったのです。しかも私の受けたその時の衝動はけっして弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠野（こうや）の真ん中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私[14]の自然はすぐそこで食い止められてしまったのです。そうして悲しいことに永久に復活しなかったのです。

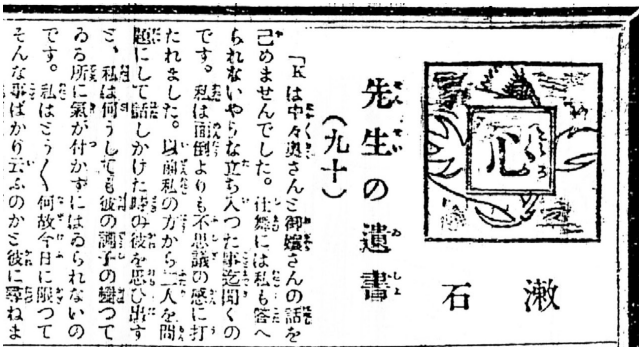
夕飯の時Kと私はまた顔を合わせました。なんにも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い目を私に向けません。なんにも知らない奥さんはいつもよりうれしそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の部屋でただいまと答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんはおおかたきまりが悪いのだろうと言って、ちょっと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんできまりが悪いのかと追窮しにかかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔つきで、事の成り行きをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それをことごとく話されてはたまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいのことを平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して部屋へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私はいろいろの弁護を自分の胸でこしらえてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向かうには足りませんでした。卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが嫌になったのです。

13 猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町のほうへ　いずれも東京都千代田区にある町名。神保町を中心に古書店が集中している。　**14 万世橋**　東京都千代田区にある、神田川に架かる橋。　**15 明神の坂**　神田明神を通る坂のこと。万世橋から本郷台に通ずる。　**16 菊坂**　本郷台から小石川に抜ける途中にある坂。　**17 この三区**　当時の東京市神田区（現在の千代田区の一部）・本郷区・小石川区をさす。

14「私の自然」とは何か。

〈時分〉〈書見〉
＊手ずれのした
＊我知らず


漱石

心

先生の遺書（九十）

「Kは中々奥さんと御嬢さんの話を己めませんでした。仕舞には私も答へられないやうな立ち入つた事迄聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思ひ出すと、私は何うしても彼の調子の變つてゐる所に氣が付かずにはゐられないのです。私はどうして何故今日に限つてそんな事ばかり云ふのかと彼に尋ねま

『こころ』連載の「東京朝日新聞」（1914年7月22日）

＊

私はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえなんとかしなければ、彼にすまないと思ったのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突っつくように刺激するのですから、私はなおつらかったのです。どこか男らしい気性をそなえた奥さんは、いつ私のことを食卓でKにすっぱぬかないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言できません。私はなんとかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならない位置に立ちました。しかし倫理[15]的に弱点を持っていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難のことのように感ぜられたのです。

私はしかたがないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変わりはありません。と言って、こしらえごとを話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるにきまっています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前にさらけ出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な道を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾（こうかつ）な男でした。そうしてそこに気のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑ったことをぜひとも周囲の人に知られなければならない窮境に陥ったのです。私はあくまで滑ったことを隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ちすくみました。

五、六日たった後、奥さんは突然私に向かって、Kにあのことを話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私をなじるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で私が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄だのに、黙って知らん顔をしているのは。」

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段なんにも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かいことを尋ねずにはいられませんでした。奥さんはもとより何も隠すわけがありません。大した話もないがと言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち着いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んでください。」と述べた時、彼は初めて奥さんの顔を見て微笑をもらしなが

15「倫理的に弱点を持っている」とはどのようなことか。

〈詰問〉〈一分一厘〉〈窮境〉

ら、「おめでとうございます。」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか。」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げることができません。」と言ったそうです。奥さんの前に座っていた私は、その話を聞いて胸*が塞がるような苦しさを覚えました。

＊

勘定してみると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったので、私は全くそれに気がつかずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけにもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼のほうがはるかに立派に見えました。「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ。」という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。私はその時さぞKが軽蔑していることだろうと思って、一人で顔を赤らめました。しかし今さらKの前に出て、恥をかかせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進もうかよそうかと考えて、ともかくも明くる日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すとぞっとします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かもしれません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと目を覚ましたのです。見ると、いつも立て切ってあるKと私の部屋との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開(あ)いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示[16]を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、きっとKの部屋をのぞきました。ランプが暗くともっているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛け布団ははね返されたように裾のほうに重なり合っているのです。そうしてK自身は向こうむきに突っ伏しているのです。

私はおいと言って声を掛けました。しかしなんの答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びまし

た。それでもKの体はちっとも動きません。私はすぐ起き上がって、敷居際まで行きました。そこから彼の部屋の様子を、暗いランプの光で見回してみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の目は彼の部屋の中を一目見るや否や、あたかもガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ちすくみました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああしまったと思いました。もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました。そうして私はがたがた震え出したのです。

それでも私[17]はついに私を忘れることができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に目をつけました。それは予期どおり私の名宛てになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したようなことはなんにも書いてありませんでした。私は私にとってどんなにつらい文句がその中に書き連ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの目に触れたら、どんなに軽蔑されるかもしれないという恐怖があったのです。私はちょっと目を通しただけで、まず助かったと思いました。（もとより世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。）

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行でとうてい行く先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片づけ方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑をかけてすまんからよろしくわびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要なこと

16「暗示」とは何をさすか。

17「私はついに私を忘れることができませんでした」とはどのようなことか。

＊胸が塞がる

はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだということに気がつきました。しかし私の最も痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

私は震える手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれをみんなの目につくように、元のとおり机の上に置きました。そうして振り返って、襖にほとばしっている血潮[18]を初めて見たのです。

—〈血潮〉—

[18]「血潮を初めて見たのです」という表現にはどのような効果があるか。

夏目漱石　一八六七（慶応三）—一九一六（大正五）年。小説家・英文学者。東京都に生まれた。『吾輩（わがはい）は猫である』で文壇に登場し、『坊（ぼ）っちゃん』『草枕』などで名声を確立した。自然主義文学に抗し、鋭い文明批判の精神によって独自の文学を打ち立てた。この作品は一九一四年に発表されたもので、本文は「漱石全集」第六巻によった。

小説

夢十夜

夏目漱石（なつめそうせき）

第一夜

こんな夢を見た。

腕組みをして枕元に座っていると、仰向（あおむ）きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔（うりざねがお）[1]をその中に横たえている。真っ白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。到底死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはっきり言った。自分も確かにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗（のぞ）き込むようにして聞いてみた。死にますとも、と言いながら、女はぱっちりと目を開けた。大きな潤いのある目で、長いまつ毛に包まれた中は、ただ一面に真っ黒であった。その真っ黒な瞳の奥に、

5

1 **瓜実顔**　ウリの種に似て、色白でふっくらした長めの顔。古くから美人の典型の一つとされた。

自分の姿が鮮やかに浮かんでいる。

自分は透き通るほど深く見えるこの黒目のつやを眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろ*に枕のそばへ口を付けて、死ぬんじゃなかろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い目を眠そうに見張ったまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、しかたがないわと言った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心*に聞くと、見えるかいって、そら、そこ[1]に、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離した。腕組みをしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう言った。

「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝[2]で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片（かけ）を墓標（はかじるし）に置いてください。そうして墓のそばに待っていてください。また会いに来ますから。」

自分は、いつ会いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、――あなた、待っていられますか。」

1「そこ」とは何をさすか。

2 真珠貝　天然の真珠や養殖真珠の母貝として用いられる貝のこと。アコヤガイ、シロチョウガイ等。

自分は黙ってうなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていてください。」と思い切った声で言った。

「百年、私の墓のそばに座って待っていてください。きっと会いに来ますから。」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い瞳[2]のなかに鮮やかに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の目がぱちりと閉じた。長いまつ毛の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな縁の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちている間(ま)に、角が取れて滑らかになったんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。

自分は苔(こけ)の上に座った。これから百年の間こうして待っているんだなと考えながら、腕組みをして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の言った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の言った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまで

5 10 15

[2]「黒い瞳のなかに鮮やかに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た」とは、どのようなことか。

＊ねんごろに
＊一心に

のっと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅[3]の天道[4]がのそりと昇って来た。そうして黙って沈んでしまった。二つとまた勘定した。

自分はこういう風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分からない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行った。それでも百年がまだ来ない。しまいには、[3]苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女にだまされたのではなかろうかと思い出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなってちょうど自分の胸のあたりまで来て止まった。と思うと、すらりと揺らぐ茎の頂に、心持ち首を傾けていた細長い一輪の蕾が、ふっくらと花びらを開いた。真っ白な百合が鼻の先で骨にこたえるほど匂った。そこへ遥かの上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花びらに接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

「百年はもう来ていたんだな。」とこの時初めて気がついた。

3 唐紅　鮮やかで濃い紅色。深紅の色。

4 天道　太陽。

3「苔の生えた丸い石」とは、どのようなことを表しているか。

第六夜

運慶[5]が護国寺[6]の山門[7]で仁王[8]を刻んでいるという評判だから、散歩ながら行ってみると、自分より先にもう大勢集まって、しきりに下馬評をやっていた。

山門の前五、六間[9]の所には、大きな赤松があって、その幹が斜めに山門の甍を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗りの門が互いに映り合ってみごとに見える。その上松の位置がいい。門の左の端を目障りにならないように、斜に切っていって、上になるほど幅を広く屋根まで突き出しているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。そのうちでも車夫[10]が一番多い。辻待ち[11]をして退屈だから立っているに相違ない。*

「大きなもんだなあ。」と言っている。

「人間を拵えるよりもよっぽど骨が折れるだろう。」とも言っている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。わっしゃまた仁王はみんな古いのばかりかと思ってた。」と言った男がある。

5 運慶　?――一二二三年。鎌倉時代初期の仏師。代表作に奈良の東大寺南大門金剛力士（仁王）像（阿形像）がある。

6 護国寺　東京都文京区にある真言宗の寺。一六八一年創建。

7 山門　寺院の門。

8 仁王　仏法の守護神として、寺門または須弥壇前面の両側に安置した一対の金剛力士像。阿吽の相をなす。

9 間　長さの単位。一間は、約一・八メートル。

10 車夫　人力車を引く職業の男性。

11 辻待ち　道端で乗客を待つこと。

〈勘定〉〈下馬評〉〈目障り〉

*……に相違ない

東大寺南大門「仁王像」（阿形像）

「どうも強そうですね。なんだってえますぜ。昔から誰が強いって、仁王ほど強い人あ無いって言いますぜ。何でも日本武尊[12]よりも強いんだってえからね。」と話しかけた男もある。この男は尻[13]をはしょって、帽子をかぶらずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿[14]と槌[15]を動かしている。*いっこう振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔の辺りをしきりに彫り抜いていく。

運慶は頭に小さい烏帽子[16]のようなものを乗せて、素袍[17]だか何だかわからない大きな袖を背中で括っている。その様子がいかにも古くさい。わいわい言ってる見物人とはまるで釣り合いが取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思った。どうも不思議なことがあるものだと考えながら、やはり立って見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇態ともとんと感じ得ない様子で一生懸命に彫ってい*

12 日本武尊　ヤマトタケルノミコト。『古事記』『日本書紀』に登場する古代の英雄。「倭建命」とも書く。

13 尻をはしょって　着物の端や裾を折って帯などに挟んで。

14 鑿　木材や石材の加工に用いる工具。槌で柄頭を打って使う。

15 槌　物を打ちたたく工具。

16 烏帽子　「元服した男子のかぶりもの。

17 素袍　室町時代に、庶民の男子が着用した裏地のない普段着。

る。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、
「さすがは運慶だな。眼*中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。天晴れだ。」と言って褒め出した。
自分はこの言葉を面白いと思った。それでちょっと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、
「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。[18]大自在の妙境に達している。」と言った。
運慶は今太い眉を一寸[19]の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を縦に返すや*否や斜に、上から槌を打ち下ろした。堅い木を一刻みに削って、[4]厚い木屑が槌の声に応じて飛んだと思ったら、小鼻のおっ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がって来た。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であった。そうして少しも疑*念をさしはさんでおらんように見えた。
「よくああ無造作に鑿を使って、思うような眉や鼻ができるものだな。」と自分はあんまり感心したから独り言のように言った。するとさっきの若い男が、
「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけっして間違うはずはない。」と言った。
自分はこの時初めて彫刻とは[5]そんなものかと思い出した。はたして*そうなら誰にでも

18 大自在の妙境　芸術・技芸などが自由で思いのままになる絶妙の境地。

19 寸　長さの単位。一寸は、約三センチメートル。

4 「厚い木屑が槌の声に応じて飛んだ」とは、どのようなことか。

5 「そんなもの」とは、どのようなことか。

〈委細〉〈奇態〉
＊いっこう……ない
＊とんと……ない
＊眼中に……ない
＊疑念をさしはさむ
＊はたして……なら

できることだと思い出した。それで急に自分も仁王が彫ってみたくなったから見物をやめてさっそく家へ帰った。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出て見ると、せんだっての暴風で倒れた樫を、薪にするつもりで、木挽きに挽かせた手頃な奴が、たくさん積んであった。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見当たらなかった。その次のにも運悪く掘り当てることができなかった。三番目のにも仁王はいなかった。自分は積んである薪を片っ端から彫って見たが、どれもこれも仁王を蔵しているのはなかった。ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないものだと悟った。それで運慶が今日まで生きている理由もほぼ分かった。

20 木挽き　樹木をのこぎりで引いて、用材に仕立てることを職業とする人。

夏目漱石　一八六七（慶応三）―一九一六（大正五）年。小説家・英文学者。東京都に生まれた。『吾輩は猫である』で文壇に登場し、『坊っちゃん』『草枕』などで名声を確立した。自然主義文学に抗し、鋭い文明批判の精神によって独自の文学を打ち立てた。この作品は一九〇八年に発表されたもので、本文は「漱石全集」第八巻によった。

小説

舞姫

森鷗外

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、[1]熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり。[2]今宵は夜ごとにここに集ひ来る[3]骨牌仲間もホテルに宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。五年前のことなりしが、平生の望み足りて、洋行の官命をかうむり、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日※ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身のほど知らぬ放言、さらぬも尋常の動[5]植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心※ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、ドイツにて物学びせし間に、一種のニル・アドミラリイ[6]の気象をや養ひ得たりけ[7]む、あらず、これには別に故あり。

1 熾熱灯　白熱電灯のこと。

2 いたづらなり　無駄である。役に立たない。

3 骨牌　カード。トランプ。

4 セイゴン　サイゴン。現在のベトナムのホーチミン。

※**日ごとに幾千言をかなしけむ**　毎日幾千のことばとなっただろうか。

5 動植金石　動物・植物・鉱物。

※**心ある人はいかにか見けむ**　思慮分別のある人はどのように見ただろうか。

6 ニル・アドミラリイ　何事にも動かされないこと。外界に左右されない態度・精神。［ラテン語］nil admirari

げに東に帰る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮き世の憂きふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふもさらなり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

ああ、ブリンヂイシイの港を出でてより、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交はりを結びて、旅の憂さを慰め合ふが航海の習ひなるに、微恙にことよせて房の内にのみ籠もりて、同行の人々にも物言ふことの少なきは、人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、スイスの山色をも見せず、イタリアの古跡にも心をとどめさせず、中頃は世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すとも言ふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾度となく我が心を苦しむ。ああ、いかにしてかこの恨みを銷せむ。もし他の恨みなりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなむ。これのみはあまりに深く我が心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電気線の鍵をひねるにはなほほどもあるべけれ

7 気象　気性。気質。
8 憂きふし　つらい事柄。
9 言ふもさらなり　言うまでもない。
10 ブリンヂイシイ　アドリア海に臨むイタリア南部の港。ブリンディジ。
11 生面　初対面。
12 微恙　ちょっとした病気。
13 腸日ごとに九廻す　心の苦しみもだえるさま。
14 銷せむ　消そう。
15 房奴　船室のボーイ。

一〈洋行〉〈官命〉〈放言〉〈惨痛〉〈懐旧〉

ば、いで、[16]その概略を文に綴りてみむ。

余は幼き頃より厳しき庭の訓[17]へを受けし甲斐に、父をば早く失ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩[18]の学館に在りし日も、東京に出でて予備黌[19]に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、※一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三年ばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課[21]の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さむも、我が家を興さむも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて、五十を越えし母に別るるをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れてベルリンの都に来ぬ。

余は模糊たる功名の念と、検束[22]に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこのヨオロッパ[23]の新大都の中央に立てり。なんらの光彩ぞ、我が目を射むとするは。なんらの色沢ぞ、我が心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪[24]のごときウンテル・デン・リンデン[25]に来て両辺なる石畳の人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだウイルヘルム一世[26]の街に臨める窓に倚りたまふ頃なりければ、様々の色に飾りなし

16 **いで**　さあ。どれ。
17 **庭の訓へ**　家庭での教育。
18 **旧藩の学館**　藩校のこと。
19 **予備黌**　東京大学予備門。旧制第一高等学校の前身。
※ **一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし**　一人っ子の私をよりどころとして暮らす母の心は慰められただろう。
20 **覚え**　信任。
21 **一課の事務**　割り当てられた仕事。
22 **検束**　抑制。自己を規制すること。
23 **ヨオロッパの新大都**　ベルリンのこと。
24 **大道髪のごとき**　大道のまっすぐなさまの形容。
25 **ウンテル・デン・リンデン**　ベルリンの中心街。ドイツ語で「菩提樹の下」

ウンテル・デン・リンデン（1909年）

たる礼装をなしたる、顔よき少女のパリまねびの粧ひしたる、かれもこれも目を驚かさぬはなきに、車道の[27]土瀝青の上を音もせで走るいろいろの馬車、雲にそびゆる楼閣の少しとぎれたる所には、晴れたる空に夕立の音を聞かせてみなぎり落つる噴井の水、遠く望めば[28]ブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮かび出でたる[29]凱旋塔の神女の像、このあまたの景物[30]目睫の間に集まりたれば、初めてここに来しものの応接[※]にいとまなきもうべなり。されど我が胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる

の意。

26 ウイルヘルム一世 Wilhelm I 一七九七―一八八八年。プロシア王。ドイツを統一し、初代ドイツ皇帝になった。

27 土瀝青 アスファルト。

28 ブランデンブルク門 ウンテル・デン・リンデンの西端にある門。三一九ページ参照。

29 凱旋塔 ブランデンブルク門の西北にあった戦勝記念塔。頂に勝利の女神が飾ってあった。

30 目睫の間 非常に近い距離。「目睫」は、目とまつげ。

※ 応接にいとまなきもうべなり 一つ一つじっくり見ている暇がないのも当然である。

一〈概略〉〈学士〉〈模糊〉〈幽静〉〈楼閣〉

美観に心をば動かさじの誓ひありて、つねに我[1]を襲ふ外物を遮りとどめたりき。

余が鈴索[31]を引き鳴らして謁を通じ、公の紹介状を出だして東来[32]の意を告げしプロシア[33]の官員は、みな快く余を迎へ、公使館よりの手つづきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、我がふるさとにて、ドイツ、フランスの語を学びしことなり。彼らは初めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

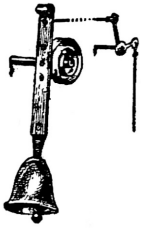
さて官事のいとまあるごとに、かねて公の許しをば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名[34]を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過ぐすほどに、公の打ち合はせも済みて、取り調べもしだいに捗りゆけば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写しとどめて、つひには幾巻をかなしけむ。大学のかたにては、幼き心に思ひ計りしがごとく、政治家になるべき特科のあるべう[35]もあらず、これかかれかと心迷ひながらも、二、三の法家の講筵[36]に連なることに思ひ定めて、謝金を納め、行きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好尚[37]なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びしときより、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めしときまで、ただ所動的[38]、器械的の人物になりて自ら悟ら

1 「我を襲ふ外物」とは何か。

31 鈴索　訪問を知らせる鈴を鳴らすためのひも。



32 東来　東洋の国から来たこと。

33 プロシア　プロイセンの英語名。ドイツ帝国建設の中心となった王国。この頃日本では、ドイツ帝国全体をプロシアとも呼んだ。

34 名を簿冊に記させつ　姓名を登録させた。

35 あるべうもあらず　あるべくもない。あるはずもない。

36 法家の講筵　法律学者の講義の席。

37 好尚　好み。欲望。

38 所動的　受け身の。

ざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたれば[39]にや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我が身の今の世に雄飛すべき政治家になるにもよろしからず、またよく法典をそらんじて獄[40]を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。余はひそかに思ふやう、我が母は余を生きたる辞書となさむとし、我が官長は余を生きたる法律となさむとやしけむ。辞書たらむはなほ堪ふべけれど、法律たらむは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいらへしつる余が、この頃より官長に寄する書にはしきりに法制の細目にかかづらふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらむには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ。また大学にては法科の講筵をよそにして、歴史文学に心を寄せ、やうやく蔗[41]を嚼む境に入りぬ。

　官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らむとしたりけめ。独立の思想を抱きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。[42]危ふきは余が当時の地位なりけり。されどこれ❷のみにては、なほ我が地位を覆すに足らざりけむを、日頃ベルリンの留学生のうちにて、ある勢力ある一群れと余との間に、おもしろからぬ関係ありて、かの人々は余を猜疑し、またつひに余を讒誣[43]するに至りぬ。

39 **当たりたればにや**　当たったからだろうか。

40 **獄を断ずる**　裁きをくだす。

※ **紛々たる万事は破竹のごとくなるべし**　入り乱れた万事は竹を割るように一気に片付くだろう。

41 **蔗を嚼む境**　次第におもしろみが分かること。

42 **いかでか喜ぶべき**　どうして喜ぶだろうか。

❷「これ」は何をさすか。

43 **讒誣する**　事実を曲げて人のことを悪く言う。

一〈遺言〉〈神童〉〈雄飛〉〈破竹〉〈猜疑〉

されどこれとてもその故なくてやは。[3]

かの人々は余がともに麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくなる心と欲を制する力とに帰して、かつは嘲りかつは嫉みたりけむ。されどこは余を知らねばなり。ああ、この故よしは、我が身だに知らざりしを、いかでか人に知らるべき。我が心はかの合歓[45]といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けむとす。我が心は処女に似たり。余が幼き頃より長者[46]の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道をあゆみしも、みな勇気ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬほどの勇気ありしにあらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。故郷を立ち出づる前にも、我が有為[47]の人物なることを疑はず、また我が心のよく耐へむことをも深く信じたりき。ああ、彼も一時。舟の横浜を離るるまでは、あつぱれ豪傑と思ひし身も、※せきあへぬ涙に手巾[48]を濡らしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなかに我が本性なりける。この心は生まれながらにやありけむ、また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけむ。

かの人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

3 どのような「故」か。

44 故よし 故由。いわれ。理由。

45 合歓 マメ科の落葉高木。その葉は夜閉じて垂れる。

46 長者 年長の人。目上の人。

47 有為 能力があること。

※せきあへぬ涙に……我が本性なりける とどめきれない涙にハンカチをぬらしたのを我ながらおかしいと思ったが、これこそむしろ私の本性だったのだ。

48 手巾 ハンカチ。

赤く白く面を塗りて、[49]赫然たる色の衣をまとひ、[50]珈琲店に座して客を引く女を見ては、行きてこれに就かむ勇気なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、プロシアにては貴族めきたる鼻音にて物言ふレ[51]エベマンを見ては、行きてこれと遊ばむ勇気なし。これらの勇気なければ、かの活発なる同郷の人々と交はらむやうもなし。この交際の疎きがために、かの人々はただ余を嘲り、余を嫉むのみならで、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の[52]艱難を閲し尽くすなかだちなりける。

ある日の夕暮れなりしが、余は[53]獣苑を漫歩して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の[54]僑居に帰らむと、[55]クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の[56]木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、頬髭長き[57]ユダヤ教徒の翁が戸前にたたずみたる居酒屋、一つの梯はただちに楼に達し、他の梯は穴蔵住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて建てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚となりてしばしたたずみしこと幾度なるを知らず。

今この所を過ぎむとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声をのみつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚か

49 赫然たる　けばけばしい。

50 珈琲店　コーヒーや酒類などを提供する店。［ドイツ語］Café

51 レエベマン　道楽者。遊び人。［ドイツ語］Lebemann

52 艱難　苦しみ。困難。

53 獣苑　ティーアガルテン（［ドイツ語］Tiergarten）の訳。ブランデンブルク門の西にある大森林公園。

54 僑居　仮住まい。下宿。

55 クロステル巷　クロステル街。

56 木欄　手すり。

57 ユダヤ教　ユダヤ人の宗教。絶対唯一神ヤハウェ（エホバ）を信奉し、モーゼの律法を奉ずる。聖典は『旧約聖書』。

一〈耐忍〉〈冤罪〉〈暫時〉〈恍惚〉

されてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。

[58]彼ははからぬ深き嘆きに遭ひて、前後を顧みるいとまなく、ここに立ちて泣くにや。我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えずそばに倚り、「何故に泣きたまふか。[59]ところに係累なき外人は、かへりて力を貸しやすきこともあらむ。」と言ひ掛けたるが、我ながら我が大胆なるにあきれたり。

彼は驚きて我が黄なる面をうち守りしが、我が真率なる心や色[60]に現れたりけむ。「君は善き人なりと見ゆ。彼[4]のごとく酷くはあらじ。また我が母のごとく。」しばし涸れたる涙の泉はまたあふれて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひたまへ、君。我が恥なき人とならむを。母は我が彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなはぬに、家に一銭の貯へだになし。」

あとは[61]歔欷の声のみ。我が眼はこのうつむきたる少女の震ふ項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かむに、まづ心を鎮めたまへ。※声をな人に聞かせたまひそ。ここは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えず我が肩に倚りしが、このときふ

58 彼　この少女をさす。「彼」は明治時代まで男女の区別なく用いられていた。

59 ところに係累なき　この地につながりのある人を持たない。

60 色　表情。

4「彼」とは誰のことか。

61 歔欷　すすり泣き。

※ 声をな人に聞かせたまひそ　泣き声を人に聞かせてはなりません。

と頭をもたげ、また初めて我を見たるがごとく、恥ぢて我が側を飛びのきつ。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡につきて、寺の筋向かひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上りて、四階目に腰を折りてくぐるべきほどの戸あり。少女は錆びたる針金の先をねぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中にはしはがれたる老媼の声して、「誰ぞ。」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあらかに[62]引き開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の跡を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿[63]の衣を着、汚れたる上靴を履きたり。エリスの余に会釈して入るを、彼は待ちかねしごとく、戸を激しくたて切りつ。

余はしばし茫然として立ちたりしが、ふと油灯の光に透かして戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞こえしが、また静かになりて戸は再び開きぬ。先の老媼は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨[64]にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を掛けたり。左手には粗末に積み上げたる煉瓦のかまどあり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を覆へる臥床[65]あり。伏したるはなき人なるべし。かまどの側なる戸を開きて余を導きつ。この所はいはゆるマンサルド[66]の街に面したる一間なれば、

5 10 15

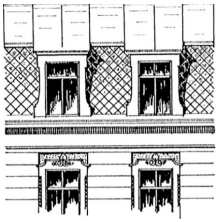
62 あらかに 荒々しく。

63 獣綿 ラシャ。羊毛を原料とした厚地の毛織物。

64 厨 台所。

65 臥床 ベッド。

66 マンサルド 屋根裏部屋。［フランス語］mansarde



〈一顧〉〈憐憫〉〈真率〉〈貧苦〉〈茫然〉〈仕立物〉〈慇懃〉

天井もなし。隅の屋根裏より窓に向かひて斜めに下がれる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭のつかふべき所に臥床あり。中央なる机には美しき氈[67]を掛けて、上には書物一、二巻と写真帳とを並べ、陶瓶[68]にはここに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍らに少女は羞を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅を潮[69]したり。手足のか細くたをやかなるは、貧家の女に似ず。老媼の室を出でし後にて、少女は少し訛りたる言葉にて言ふ。「許したまへ。君をここまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎みたまはじ。明日に迫るは父の葬り、たのみに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさむ。彼はヴイクトリア座[70]の座頭なり。彼が抱[71]へとなりしより、はや二年なれば、事なく我らを助けむと思ひしに、人の憂ひにつけ込みて、身勝手なる言ひ掛け[72]せむとは。我を救ひたまへ、君。※金をば薄き給金をさきて返しまゐらせむ。[73]よしや我が身は食らはずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身を震はせたり。その見上げたる目には、人に否とは言はせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、また自らは知らぬにや。

我が隠しには二、三[74]マルクの銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急をしのぎたまへ。質屋の使ひのモンビシユウ街三番地にて太田と訪ね来む折には価を取らすべきに。」

67 氈　毛織りのテーブル・クロス。

68 陶瓶　陶製の花瓶。

69 潮したり　帯びている。

※**よも憎みたまはじ**　まさかお憎みにならないでしょう。

70 ヴイクトリア座　ウンテル・デン・リンデンの北東にあった劇場。

71 抱へ　雇われ人。

72 言ひ掛け　言いがかり。

※**金をば薄き給金をさきて返しまゐらせむ**　お金は少ない給料を割いてお返しいたしましょう。

73 よしや　たとえ。

74 マルク　かつてドイツで使用されていた貨幣の単位。［ドイツ語］Mark

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のために出だしたる手を唇に当てたるが、はらはらと落つる熱き涙を我が手の背に注ぎつ。

ああ、なんらの悪因[5]ぞ。この恩を謝せむとて、自ら我が僑居に来し少女は、シヨオペンハウエル[75]を右にし、シルレル[76]を左にして、終日[77]兀坐する我が読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。このときを初めとして、余と少女との交はりやうやくしげくなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了[78]にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。我ら二人の間にはまだ痴騃[79]なる歓楽のみ存じたりしを。

その名を指さむは憚りあれど、同郷人の中に事*を好む人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふことを、官長のもとに報じつ。さらぬだに[80]余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり。公使がこの命を伝ふるとき余に言ひしは、御身もし即時に郷に帰らば、路用[81]を給すべけれど、もしなほここに在らむには、公の助けをば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とやかうと[82]思ひ煩ふうち、我が生涯にてもつとも悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通はほとんど同時に出だしし ものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母

5 「悪因」という言い方をしたのはなぜか。

75 シヨオペンハウエル Arthur Schopenhauer 一七八八―一八六〇年。ドイツの哲学者。著書に『意志と表象としての世界』などがある。ショーペンハウアー。

76 シルレル Friedrich von Schiller 一七五九―一八〇五年。ドイツの詩人・劇作家。戯曲に『ヴィルヘルム・テル』などがある。シラー。

77 兀坐 じっと座っていること。

78 速了にも 早合点して。

79 痴騃 子供っぽいさま。

80 さらぬだに そうでなくてさえ。

81 路用 旅費。

82 とやかうと あれこれと。

〈質屋〉〈悪因〉〈歓楽〉〈猶予〉

＊事を好む

の書中の言をここに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運びを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、このときまではよそ目に見るより清白なりき。彼は父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五のとき舞の師のつのりに応じて、この恥づかしき業を教へられ、クルズス[83]果てて後、ヴイクトリア座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデル[84]が当世の奴隷と言ひしごとく、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋がれ、昼の温習[85]、夜の舞台と厳しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をもまとへ、場外にては独り身の衣食も足らずがちなれば、親はらからを養ふものはその辛苦いかにぞや。されば彼らの仲間にて、賤しき限りなる業に堕ちぬは稀なりとぞいふなる。エリスがこれを逃れしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とによりてなり。彼は幼きときより物読むことをばさすがに好みしかど、手に入るは卑しきコルポルタアジユ[86]と唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相知る頃より、余が貸しつる書を読みならひて、やうやく趣味をも知り、言葉の訛りをも正し、いくほどもなく余に寄する文にも誤字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまづ師弟の交はりを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事にかかはりしを包み隠しぬれど、彼は余に向かひて母にはこれを秘めたまへと言ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎

83 クルズス　講習。課程。［ドイツ語］Kursus

84 ハツクレンデル　Friedrich Wilhelm von Hackländer　一八一六―七七年。ドイツの作家。著書『ヨーロッパの奴隷生活』に、踊り子を奴隷の例として挙げている。ハックレンダー。

85 温習　おさらい。

86 コルポルタアジユ　行商。［フランス語］colportage

6 なぜ「秘めたまへ」と言ったのか。

んぜむを恐れてなり。

ああ、詳しくここに写さむも要なけれど、余が彼を愛づる心のにはかに強くなりて、つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしをあやしみ、またそしる人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、初めて相見しときよりあさくはあらぬに、今我が[87]数奇を哀れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髄を射て、※恍惚の間にここに及びしをいかにせむ。

公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。このままにて郷に帰らば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮*かぶ瀬あらじ。さればとてとどまらむには、学資を得べき手だてなし。

このとき余を助けしは今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報[88]に出でしを見て、某新聞紙の編集長に説きて、余を社の通信員となし、ベルリンにとどまりて政治学芸のことなどを報道せしむることとなしつ。

社の報酬は言ふに足らぬほどなれど、すみかをもうつし、午餐に行く食店をもかへたらむには、微かなる暮らしは立つべし。[89]とかう思案するほどに、心の誠を

87 数奇　不運。不幸せ。

※ 恍惚の間にここに及びしをいかにせむ　心奪われている間にこうなってしまったのをどうしたらよいのか。

88 官報　日刊の政府機関紙。詔勅・法令・辞令など各省の通達事項を掲載する。

89 とかう　とかく。あれこれと。

〈免官〉〈危急存亡〉〈脳髄〉
＊色を失う
＊浮かぶ瀬

顕して、助けの綱を我に投げ掛けしはエリスなりき。彼はいかに母を説き動かしけむ、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。

朝の珈琲果つれば、彼は温習に行き、さらぬ日には家にとどまりて、余はキヨオニヒ街[90]の間口狭く奥行きのみいと長き休息所[91]に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でてかれこれと材料を集む。この切り開きたる引き窓[92]より光を取れる室にて、定まりたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に貸して己は遊び暮らす老人、取引所の業の隙を盗みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷ややかなる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小女が持てくる一盞[93]の珈琲の冷むるをも顧みず、空きたる新聞の細長き板ぎれに挟みたるを、幾種となく掛け連ねたるかたへの壁に、幾度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けむ。また一時近くなるほどに、温習に行きたる日には帰り路によぎりて[94]、余とともに店を立ち出づるこの常ならず軽き、掌上の舞をもなし得つべき少女を、怪しみ見送る人もありしなるべし。

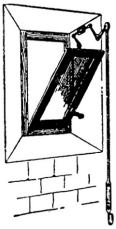
我が学問は荒みぬ。屋根裏の一灯微かに燃えて、エリスが劇場より帰りて、椅子に寄りて縫ひ物などする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せしとは殊にて[96]、今は活発々たる政界の運動、文学美術

90 キヨオニヒ街　ケーニヒ街。

91 休息所　「珈琲店」と同じ。

92 引き窓　綱を引いて開閉する天窓。

93 一盞　一杯。



94 よぎりて　立ち寄って。

95 掌上の舞　身振りのごく軽い舞。

96 殊にて　異なって。

97 ビヨルネ　Ludwig Börne　一七八六―一八三七年。ドイツの評論家。著書に『パリだより』などがある。ベルネ。

にかかはる新現象の批評など、かれこれと結び合はせて、力の及ばむ限り、ビヨルネよりはむしろハイネを学びて思ひを構へ、様々の文を作りし中にも、引き続きてウイルヘルム一世とフレデリツク三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退いかんなどのことにつきては、ことさらに詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵書を繙き、旧業を尋ぬることも難く、大学の籍はまだ削られねど、謝金を納むることの難ければ、ただ一つにしたる講筵だに行きて聴くことは稀なりき。

我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにと言ふに、およそ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にてドイツにしくはなからむ。幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学にしげく通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼らの仲間にはドイツ新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

明治二十一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ砂をも蒔け、鍤をもふるへ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の所は見ゆめれど、表のみは一面に凍りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を温め、かまどに火

98 **ハイネ** Heinrich Heine 一七九七—一八五六年。ドイツの詩人。

99 **フレデリツク三世** Friedrich III 一八三一—八八年。一八八八年三月、父ヴィルヘルム一世の死によって跡を継いだが、六月に死去。フリードリッヒ三世。

100 **崩殂** 崩御。

101 **新帝** フレデリック三世の子、ヴィルヘルム二世（一八五九—一九四一年）。

102 **ビスマルク** Otto Eduard Leopold von Bismarck 一八一五—九八年。ドイツの政治家。ヴィルヘルム二世と政策上の意見が対立し、一八九〇年三月に首相を辞職した。

103 **一隻の眼孔** ものを見通すすぐれた見識のこと。

※ **社説をだによくはえ読まぬがあるに** 社説さえ満足に読めない者がいるのに。

104 **坎坷** 平らでないこと。また、行き悩むこと。

105 **見ゆめれど** 見えるようだが。

一〈旧業〉〈散見〉〈高尚〉〈総括的〉

を焚きつけても、壁の石を通し、衣の綿を穿つ北ヨオロッパの寒さは、なかなか[106]に堪へ難かり。エリスは二、三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に扶けられて帰り来しが、それより心地悪しとて休み、物食ふごとに吐くを、悪阻といふものならむと初めて心づきしは母なりき。ああ、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もしまことなりせばいかにせまし。※

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。[7] エリスは床に臥すほどにはあらねど、小さき鉄炉[107]のほとりに椅子さし寄せて言葉少なし。このとき戸口に人の声して、ほどなく庖厨[108]に在りしエリスが母は、郵便の書状を持て来て余に渡しつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手はプロシアのものにて、消印にはベルリンとあり。いぶかりつつも開きて読めば、とみのことにてあらかじめ知らす[109]るに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣につきて我も来たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く来よ。汝が名誉を回復するもこのときにあるべきぞ。[110]心のみ急がれて用事をのみ言ひやるとなり。読み終はりて茫然たる面もちを見て、エリス言ふ。「故郷よりの文なりや。※悪しき便りにてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書状と思ひしならむ。「否、心にな掛けそ。御身も名を知る相沢が、大臣とともにここに来て我を呼ぶなり。急ぐといへば今よりこそ。」

かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせむと[111]

106 **なかなかに**　なまじのことでは。

※ **もしまことなりせばいかにせまし**　もし本当であったならどうしたらよいだろう。

7 なぜ「心は楽しからず」なのか。

107 **鉄炉**　鉄製のストーブ。

108 **庖厨**　台所。

109 **とみのこと**　急なこと。

110 **見まほし**　会いたい。

※ **悪しき便りにてはよも**　悪い知らせではまさかないでしょうね。

111 **まみえもやせむ**　面会もするだろうか。

112 **上襦袢**　ワイシャツ。

113 **ゲエロツク**　フロックコート。男性用の昼間の礼服。［ドイツ語］Gehrock

114 **襟飾り**　ネクタイ。

思へばならむ、エリスは病をつとめて起ち、上襦袢[112]も極めて白きを選び、丁寧にしまひ置きしゲエロツク[113]といふ二列ぼたんの服を出だして着せ、襟飾[114]りさへ余がために手づから結びつ。

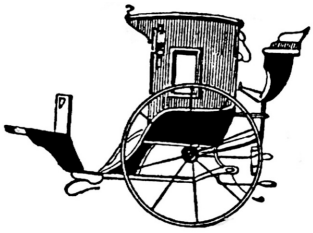
「これにて見苦しとは誰もえ言はじ。我が鏡に向きて見たまへ。何故にかく不興なる面もちを見せたまふか。我ももろともに行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣を改めたまふを見れば、なにとなく我が豊太郎の君とは見えず。」また少し考へて。「よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見捨てたまはじ。我が病は母ののたまふごとくならずとも。」

8「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でむの望みは絶ちしより幾年をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。ただ年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等ドロシユケ[115]は、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼を下りつ。彼は凍れる窓を開け、乱れし髪を朔風[116]に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしはカイゼルホオフ[117]の入り口なり。門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を上り、中央の柱にプリユツシユ[118]を被へるゾフア[119]を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房[120]に入りぬ。外套をばここにて脱

8「何、富貴。」とはどのような気持ちで言ったものか。

115 **ドロシユケ** 一頭立ての辻馬車。［ドイツ語］Droschke



116 **朔風** 北風。

117 **カイゼルホオフ** ホテルの名。

118 **プリユツシユ** 毛織りビロード。［フランス語］peluche

119 **ゾフア** ソファ。長椅子。［ドイツ語］Sofa

120 **前房** ロビー。

―〈卒倒〉〈不興〉〈富貴〉

ぎ、廊(わたどの)をつたひて室(へや)の前まで行きしが、余は少し踟躕(ちうう)[121]したり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢(あひざは)が、今日はいかなる面もちして出で迎ふらむ。室に入りて相対して見れば、形こそ旧(もと)に比ぶれば肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の気象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにもいとまあらず、引かれて大臣に謁し、委託せられしはドイツ語にて記せる文書(もんじよ)の急を要するを翻訳せよとのことなり。余が文書を受領して大臣の室を出でしとき、相沢は後より来て余と午餐(ひるげ)[122]を共にせむと言ひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路はおほむね平滑なりしに、轗軻数奇(かんかさくき)[123]なるは我が身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閲歴を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなかに余を責めむとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の終はりしとき、彼は色を正していさむるやう、この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今さらに言はむも甲斐(かひ)なし。とはいへ、学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女(をとめ)の情にかかづらひて、目的なき生活(なりはひ)をなすべき。今は天方伯(あまがた)もただドイツ語を利用せむの心のみなり。己もまた伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強ひてその成心[124]を動かさむとはせず、伯が心中にて曲庇者(きよくひもの)[125]なりなんど思はれむは、朋友(ほういう)に利なく、己に損あればなり。人を薦

121 踟躕 ためらうこと。

122 生路 生活の道。生きてきた道。

123 轗軻 不遇。

124 成心 心にある考え。思い込み。

125 曲庇者 道理を曲げて人をかばう者。

むるはまづその能を示すにしかず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交はりなり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

大洋に舵を失ひし舟人が、[9]遥かなる山を望むごときは、相沢が余に示したる前途の方針なり。されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ行きつかむも、否、はたして行きつきぬとも、我が中心[126]に満足を与へむも定かならず。貧しきが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。※我が弱き心には思ひ定めむよしなかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たむと約しき。余は守るところを失はじと思ひて、己に敵するものには抗抵[127]すれども、友に対して否とはえ答へぬが常なり。

別れて出づれば風面を打てり。二重の玻璃窓を厳しく鎖して、大いなる陶炉[128]に火を焚きたるホテルの食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さはことさらに堪へ難く、膚粟立つとともに、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻訳は一夜になし果てつ。カイゼルホオフへ通ふことはこれよりやうやくしげくなりもて行くほどに、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近頃故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯あ

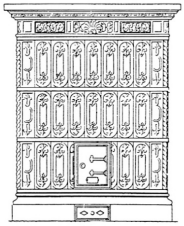
9「遥かなる山」とは具体的に何をさすか。

126 中心 心の中。胸中。

※ 我が弱き心には思ひ定めむよしなかりしが 私の弱い心には決心するすべもなかったが。

127 抗抵 抵抗。

128 陶炉 陶製の暖炉。



〈品行〉〈方正〉〈激賞〉〈細叙〉〈胸臆〉〈閲歴〉〈情縁〉

りしことどもを告げてうち笑ひたまひき。

一月ばかり過ぎて、ある日伯は突然我に向かひて、「余は明旦[129]、ロシアに向かひて出発すべし。従ひて来べきか。」と問ふ。余は数日間、かの公務にいとまなき相沢を見ざりしかば、この問ひは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余は我が恥を表さむ。この答へはいち早く決断して言ひしにあらず。余は己が信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答への範囲をよくも量らず、ただちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難きに心づきても、強ひて当時の心虚なりしを覆ひ隠し、耐忍してこれを実行することしばしばなり。

この日は翻訳の代に、旅費さへ添へて賜りしを持て帰りて、翻訳の代をばエリスに預けつ。これにてロシアより帰り来むまでの費えをば支へつべし[130]。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりし故、幾月か心づかでありけむ。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立ちのことにはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我が心を厚く信じたれば。

鉄路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身に合はせて借りたる黒き礼服、新たに買ひ求めたるゴタ板[131]の魯廷[132]の貴族譜、二、三種の辞書などを、小

129 明旦　明日の朝。

130 支へつべし　支えることができるだろう。

131 ゴタ板　ドイツ中部の小都市ゴタで刊行された書物。ヨーロッパ各地の貴族の系図や宮廷行事などを記したシリーズがあった。

132 魯廷　ロシアの宮廷。

※**うしろめたかるべければとて**　（私も）気がかりであろうというので。

133 知る人がり　知人のもとへ。

134 舌人　通訳。

135 青雲　高位高官。ロシアの宮廷をさす。

136 ペエテルブルク　帝政ロシアの首府。現在のサンクトペテルブルグ。

137 囲繞　取り囲むこと。

138 黄蠟の燭　ミツバチの巣から作る黄色

カバンに入れたるのみ。さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出で行く跡に残らむも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらむにはうしろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。余は旅装整へて戸を鎖し、鍵をば入り口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

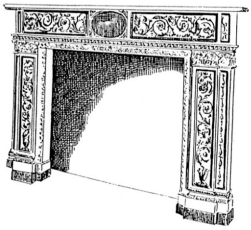
魯国行きにつきては、何事をか叙すべき。我が舌人たる任務はたちまちに余を拉し去りて、青雲の上に落としたり。余が大臣の一行に従ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を囲繞せしは、パリ絶頂の驕奢を、氷雪のうちに移したる王城の粧飾、ことさらに黄蠟の燭を幾つともなく点したるに、幾星の勲章、幾枝のエポレットが映射する光、彫鏤の巧みを尽くしたるカミンの火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇のひらめきなどにて、この間フランス語を最も円滑に使ふものは我なるが故に、賓主の間に周旋して事を弁ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに書を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて灯火に向かはむことの心憂さに、知る人のもとにて夜に入るまで物語りし、疲るるを待ちて家に帰り、ただちに寝ねつ。次の朝目覚めしときは、なほ独り跡に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でしときの心細さ、かかる思ひをば、生計に苦しみて、今日の日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書のあらましなり。

139 エポレット 肩章。［フランス語］ épaulette

140 彫鏤 彫刻して飾りをほどこすこと。

141 カミン 壁に取りつけた暖炉。［ドイツ語］ Kamin



142 賓主 客と主人。

〈失錯〉〈咄嗟〉〈鉄路〉〈旅装〉〈映射〉〈周旋〉

またほど経ての書はすこぶる思ひ迫りて書きたるごとくなりき。文をば否といふ字にて起こしたり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君はふるさとに頼もしき族なしとのたまへば、この地によき世渡りの生計あらば、※とどまりたまはぬことやはある。また我が愛もて繋ぎ留めではやまじ。それもかなはで東に帰りたまはむとならば、親とともに行かむはやすけれど、かほどに多き路用をいづくよりか得む。いかなる業をなしてもこの地にとどまりて、君が世に出でたまはむ日をこそ待ためと常には思ひしが、しばしの旅とて立ち出でたまひしよりこの二十日ばかり、別離の思ひは日にけに茂りゆくのみ。*袂を分かつはただ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷ひなりけり。我が身の常ならぬがやうやくにしるくなれる、それさへあるに、よしやいかなることありとも、※我をばゆめな棄てたまひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我が身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。我が東に行かむ日には、[143]ステッチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せむとぞ言ふなる。書きおくりたまひしごとく、大臣の君に重く用ゐられたまはば、我が路用の金はともかくもなりなむ。今はひたすら君がベルリンに帰りたまはむ日を待つのみ。

ああ、余はこの書を見て初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍[10]き心なり。余は我が身一つの進退につきても、また我が身にかかはらぬ他人のこ

※ **とどまりたまはぬことやはある**　とどまってくださらないことがあるでしょうか、いや、ありません。

※ **我をばゆめな棄てたまひそ**　私をけっして捨てないでください。

143 **ステッチン**　ベルリンの北東約一三〇キロメートルにある都市。現在はポーランド領。シチェチン。

10 「鈍き心」とはどのようなことか。

とにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさむとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されど我が近眼[144]はただ己が尽くしたる職分をのみ見き。余はこれに未来の望みを繋ぐことには、神も知るらむ、絶えて思ひ至らざりき。されど今ここに心づきて、我が心はなほ冷然たりしか。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋上の鳥[145]のごとくなりしが、今はややこれを得たるかと思はるるに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に帰りて後もともにかくてあらば云々と言ひしは、大臣のかくのたまひしを、友ながらも公事なれば明らかには告げざりしか。今さら思へば、余が軽率にも彼に向かひてエリスとの関係を絶たむと言ひしを、早く大臣に告げやしけむ。

ああ、ドイツに来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。先にこれを操りしは、我が某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一行とともにベルリンに帰りしは、あたかもこれ新年の旦[146]なりき。停車場に別れを告げて、我が家をさして車を駆りつ。ここにては今も除夜に眠らず、元旦に

144 近眼　将来が見通せないこと。近視眼。

145 屋上の鳥　取ろうとしても手の届かないもの。捉えがたいもののたとえ。

146 あたかもこれ　ちょうど。

〈明視〉〈順境〉〈冷然〉〈本領〉

＊袂を分かつ

眠るが習ひなれば、万戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角[147]ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きらきらと輝けり。車はクロステル街に曲がりて、家の入り口に駐まりぬ。このとき窓を開く音せしが、車よりは見えず。馭丁[148]にカバン持たせて梯を上らむとするほどに、エリスの梯を駆け下るに逢ひぬ。彼が一声叫びて我が項を抱きしを見て馭丁はあきれたる面もちにて、何やらむ髭の内にて言ひしが聞こえず。

「よくぞ帰り来たまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなむを。」

我が心はこのときまでも定まらず、故郷を思ふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を圧せむとせしが、ただこの一刹那、低徊蹰躇[149]の思ひは去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我が肩に倚りて、彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼のごとく叫びし馭丁は、いち早く上りて梯の上に立てり。

戸の外に出で迎へしエリスが母に、馭丁をねぎらひたまへと銀貨を渡して、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白きレエスなどをうづたかく積み上げたれば。

エリスはうち笑みつつこれを指して、「何とか見たまふ、この心がまへを。」と言ひつつ一つの木綿ぎれを取り上ぐるを見れば襁褓[150]なりき。「我が心の楽しさを

147 稜角ある かどのとがった。

148 馭丁 御者。

149 低徊 思いに沈みながら行きつ戻りつすること。考えあぐむこと。

150 襁褓 おむつ。産着。

思ひたまへ。産まれむ子は君に似て黒き瞳をや持ちたらむ。この瞳。ああ、夢にのみ見しは君が黒き瞳なり。産まれたらむ日には君が正しき心にて、よもあだし名をば名のらせたまはじ。」彼は頭を垂れたり。「幼しと笑ひたまはんが、寺に入らむ日はいかにうれしからまし。」見上げたる目には涙満ちたり。

二、三日の間は大臣をも、旅の疲れやおはさむとてあへて訪はず、家にのみ籠もりをりしが、ある日の夕暮れ使ひして招かれぬ。行きてみれば待遇殊にめでたく、ロシア行きの労を問ひ慰めて後、我とともに東に帰る心なきか、君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなむ、滞留のあまりに久しければ、様々の係累もやあらむと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落ち[152]ゐたりとのたまふ。その気色いなむべくもあらず。あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらずば、本国をも失ひ、名誉を引きかへさむ道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られむかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。ああ、なんらの特操[153]なき心ぞ、「承りはべり。」と答へたるは。

黒がね[154]の額はありとも、帰りてエリスに何とか言はむ。ホテルを出でしときの我が心の錯乱は、たとへむに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思ひに沈みて行くほどに、行き合ふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。しば

※ **よもあだし名をば名のらせたまはじ**　まさかあなたと別の姓を名乗らせるようなことはなさらないでしょう。

151 寺に入らむ日　幼児の洗礼のために教会に行く日。

152 落ちゐたり　安心した。

153 特操　常に守っているみさお。

154 黒がねの額　鉄面皮。厚かましいこと。

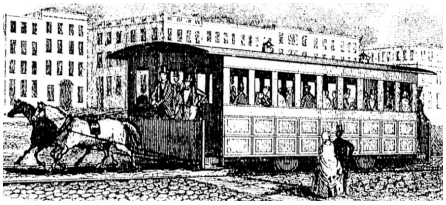
〈除夜〉〈寂然〉〈栄達〉〈一瞥〉〈広漠〉〈心頭〉

らくしてふとあたりを見れば、獣苑の傍らに出でたり。倒るるごとくに道の辺の腰掛けに倚りて、焼くがごとく熱し、槌にて打たるるごとく響く頭を榻背[155]に持たせ、死したるごときさまにて幾時をか過ごしけむ。激しき寒さ骨に徹すと覚えて醒めしときは、夜に入りて雪はしげく降り、帽のひさし、外套の肩には一寸ばかり[156]も積もりたりき。

もはや十一時をや過ぎけむ、モハビット[157]、カルル街通ひの鉄道馬車[158]の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルゲル門のほとりの瓦斯灯[159]は寂しき光を放ちたり。立ち上がらむとするに足の凍えたれば、両手にてさすりて、やうやく歩み得るほどにはなりぬ。

足の運びの捗らねば、クロステル街まで来しときは、半夜をや過ぎたりけむ。ここまで来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店はなほ人の出入り盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えず。我が脳中にはただただ我は許すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずとおぼしく、炯然[162]たる一星の火、暗き空にすかせば、明らかに見ゆるが、降りしきる鷺のごとき雪片に、たちまち覆はれ、たちまちまた顕れて、風にもてあそばるるに似たり。戸口に入りしより疲れ



155 榻背　ベンチの背。

156 寸　長さの単位。一寸は、約三センチメートル。

157 モハビット　ベルリン市北西の地域名。モアビット。

158 カルル街　シュプレー川の北岸を東西に通ずる街路。カール街。

159 鉄道馬車　レール上を馬車で走り、人を乗せて運ぶ交通機関。馬車鉄道。

ブランデンブルク門（1894年）

を覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふごとくに梯を上りつ。庖厨を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に倚りて襁褓縫ひたりしエリスは振り返へりて、「あ。」と叫びぬ。「いかにかしたまひし。御身の姿は。」

驚きしもうべなりけり、蒼然として死人に等しき我が面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪はお[163]どろと乱れて、幾度か道にてつまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、所々は裂けたれば。

余は答へむとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれ

160 ブランデンブルゲル門　ブランデンブルク門のこと。

161 半夜　真夜中。

※ 人の出入り盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えず　人の出入りが盛んでにぎやかであったろうが、全く覚えていない。

162 炯然たる　きらきらと明るい。

11 「風にもてあそばるる」とは、何のどのようなようすか。

163 おどろと　ぼうぼうと。

―〈面色〉

て立つに堪へねば、椅子をつかまむとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。

人事を知るほどになりしは数週の後なりき。[164] 熱激しくて譫語のみ言ひしを、エリスが懇ろにみとるほどに、ある日相沢は訪ね来て、余が彼に隠したる顚末を[12]つばらに知りて、大臣には病のことのみ告げ、よきやうに繕ひおきしなり。[165] 余は初めて病床に侍するエリスを見て、その変はりたる姿に驚きぬ。彼はこの数週のうちにいたく痩せて、血走りし目はくぼみ、灰色の頬は落ちたり。相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

後に聞けば彼は相沢に逢ひしとき、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞こえ上げし一諾を知り、にはかに座より躍り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、[167] かくまでに我をば欺きたまひしか。」と叫び、その場に倒れぬ。相沢は母を呼びて共に助けて床に臥させしに、しばらくして醒めしときは、目は直視したるままにて傍らの人をも見知らず、我が名を呼びていたく罵り、髪をむしり、布団を嚙みなどし、またにはかに心づきたるさまにて物を探り求めたり。母の取りて与ふる物をばことごとく投げうちしが、机の上なりし襁褓を与へたるとき、探りみて顔に押し当て、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用はほとんど全く廃して、その痴な

164 人事を知る　意識を回復する。

12「余が彼に隠したる顚末」とは何か。

165 つばらに　詳しく。つぶさに。

166 聞こえ上げし　申し上げた。

167 ぬし　敬称で、様、さん、の意。

ること赤児のごとくなり。医に見せしに、過激なる心労にて急に起こりしパラノイア[168]といふ病なれば、治癒の見込みなしと言ふ。ダルドルフの癲狂院[170]に入れむとせしに、泣き叫びて聴かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出だしては見、見ては欷歔す。余が病床をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。ただ折々思ひ出したるやうに「薬を、薬を。」[13]と言ふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を注ぎしは幾度ぞ。大臣に従ひて帰東の途に上りしときは、相沢と議りてエリスが母に微かなる生計を営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺しし子の生まれむ折のことをも頼みおきぬ。

ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裏に一点の彼を憎むこころ今日までも残れりけり。

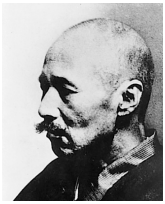
一〈顚末〉〈病床〉〈一諾〉

168 パラノイア　偏執症。精神障害の一種。体系的な妄想が存在するが、その他の点では人格の障害はない。パラノイアについては、時代・人によって見解が異なっており、この作品の当時は、今日より広い範囲の症状をさした。［ドイツ語］Paranoia

169 ダルドルフ　ベルリンの北約一〇キロメートルにある町。

170 癲狂院　精神病院。

13 「薬を」とは誰の薬か。



森　鷗外　一八六二（文久二）―一九二二（大正一一）年。小説家・医学者。島根県に生まれた。陸軍軍医として一八八四年、ドイツに留学した。公務のかたわら多彩な文学活動を展開、日本近代文学の形成に大きく関与する。小説に『雁』『高瀬舟』『渋江抽斎』、翻訳にアンデルセン『即興詩人』などがある。この作品は一八九〇年に発表されたもので、本文は「鷗外全集」第一巻によった。

評論

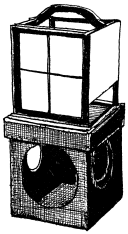
陰翳礼讃

谷崎潤一郎

京都に「わらんじや」という有名な料理屋があって、ここの家では近ごろまで客間に電灯をともさず、古風な燭台[1]を使うのが名物になっていたが、ことしの春、久しぶりで行ってみると、いつの間にか行灯[2]式の電灯を使うようになっている。いつからこうしたのかと聞くと、去年からこれにいたしました、蠟燭の灯では余り暗すぎるとおっしゃるお客様が多いものでござりますから、よんどころなく*こういうふうにいたしましたが、やはり昔のままのほうがよいとおっしゃるお方には、燭台を持ってまいりますと言う。で、せっかくそれを楽しみにして来たのであるから、燭台に替えてもらったが、その時私が感じたのは、日本の漆器の美しさは、そういうぼんやりした薄明かりの中に置いてこそ、初めてほんとうに発揮されるということであった。「わらんじや」の座敷というのは四畳半ぐらいのこぢんまりした茶席であって、床柱や天井なども黒光りに光ってい

1 燭台　蠟燭を立てて火をともす台。

2 行灯　木や竹のわくに紙をはり、中に油皿を据えて火をともす照明具。



るから、行灯式の電灯でももちろん暗い感じがする。が、それをいっそう暗い燭台に改めて、その穂のゆらゆらとまたたく陰にある膳や椀を見つめていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違った魅力を帯び出してくるのを発見する。そしてわれわれの祖先が漆という塗料を見いだし、それを塗った器物の色沢に愛着を覚えたことの偶然[1]でないのを知るのである。友人サバルワル君の話に、インドでは現在でも食器に陶器を使うことを卑しみ、多くは塗り物を用いるという。われわれはその反対に、茶事とか、儀式とかの場合でなければ、膳と吸い物椀のほかはほとんど陶器ばかりを用い、漆器というと、やぼくさい、雅味*のないものにされてしまっているが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「明るさ」のせいではないであろうか。事実、「闇」を条件に入れなければ漆器の美しさは考えられないと言っていい。今日では白漆というようなものもできたけれども、昔からある漆器の肌は、黒か、茶か、赤であって、それは幾重もの「闇」が堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生まれ出たもののように思える。はでな蒔絵[3]などを施したピカピカ光る蠟塗りの手箱とか、文台とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさえ思えることがあるけれども、もしそれらの器物を取り囲む空白を真っ黒な闇で塗りつぶし、太陽や電灯の光線に代えるに一点の灯明か蠟燭の明かりにしてみたまえ、

1「偶然でない」とはどのようなことか。

3 蒔絵　金粉・銀粉・螺鈿などで、漆器の表面に絵模様などを描く工芸。

〈発揮〉〈茶席〉〈色沢〉
＊よんどころなく
＊雅味のない

江戸時代の蒔絵（尾形光琳「八橋蒔絵硯箱」）

たちまちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重重しいものになるであろう。古えの工芸家がそれらの器に漆を塗り、蒔絵を画く時は、必ずそういう暗い部屋を頭に置き、乏しい光の中における効果をねらったのに違いなく、金色を贅沢に使ったりしたのも、それが闇に浮かび出るぐあいや、灯火を反射する加減を考慮したものと察せられる。つまり金蒔絵は明るい所で一度にぱっとその全体を見るものではなく、暗い所でいろいろの部分がときどき少しずつ底光りするのを見るようにできているのであって、豪華絢爛な模様の大半を闇に隠してしまっているのが、言い知れぬ余情を催すのである。そして、あのピカピカ光る肌のつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にもおりおり風のおとずれのあることを教えて、そぞろに人を瞑想に誘い込む。もしあの陰鬱な室内に漆器というものがなかったなら、蠟燭や灯明の醸し出す怪しい光の夢の世界が、その灯のはためきが打っている夜の脈搏が、どんなに魅力を減殺されることであろう。まことにそれは、

畳の上に幾すじもの小川が流れ、池水がたたえられているごとく、一つの灯影をここかしこにとらえて、細く、かそけく、ちらちらと伝えながら、夜[2]そのものに蒔絵をしたような綾(あや)を織り出す。け*だし食器としては陶器も悪くないけれども、陶器には漆器のような陰翳がなく、深みがない。陶器は手に触れると重く冷たく、しかも熱を伝えることが早いので熱い物を盛るのに不便であり、その上カチカチという音がするが、漆器は手ざわりが軽く、柔らかで、耳につくほどの音を立てない。私は、吸い物椀を手に持った時の、手のひらが受ける汁の重みの感覚と、生あたたかい温味(ぬくみ)とを何よりも好む。それは生まれたての赤ん坊のぷよぷよした肉体を支えたような感じでもある。吸い物椀に今も塗り物が用いられるのは全く理由のあることであって、陶器の入れ物ではああはいかない。第一、蓋を取った時に、陶器では中にある汁の身や色合いが皆見えてしまう。漆器の椀のいいことは、まずその蓋を取って、口に持っていくまでの間、暗い奥深い底のほうに、容器の色とほとんど違わない液体が音もなくよどんでいるのを眺めた瞬間の気持ちである。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることはできないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗をかいているので、そこから湯気が立ち昇りつつあることを知り、その湯気が運ぶにおいによって口に含む前にぼんやり味わいを予覚する。その瞬間の心持ち、スープを浅い白ちゃけた皿に入れて出す西洋

5　10　15

2「夜そのものに蒔絵をしたような」とはどのようなことか。

〈反射〉〈減殺〉
*余情を催す
*けだし

流に比べてなんという相違か。[3]それは一種の神秘であり、禅味[4]であるとも言えなくはない。

私は、吸い物椀を前にして、椀がかすかに耳の奥へ沁(し)むようにジイと鳴っている、あの遠い虫の音のようなおとを聴きつつこれから食べる物の味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境[5]にひき入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎるおとに尾上(おのえ)[6]の松風を連想しながら無我*の境に入るというのも、恐らくそれに似た心持ちなのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと言われるが、こういう場合、私は見るものである以上に瞑想するものであると言おう。そうしてそれは、闇にまたたく蠟燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。かつて漱石(そうせき)[7]先生は『草枕』の中で羊羹(ようかん)の色を賛美しておられたことがあったが、そういえばあの色などはやはり瞑想的[4]ではないか。玉(ぎょく)のように半透明に曇った肌が、奥のほうまで日の光を吸い取って夢みるごときほの明るさを含んでいる感じ、あの色合いの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどはあれに比べるとなんという浅はかさ、単純さであろう。だがその羊羹の色合いも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑らかなものを口中に含む時、あたかも室内の暗黒が一個の甘い塊になって舌の先でとけるのを感じ、ほんとうは

3 「それ」は何をさすか。

4 禅味 世俗をはなれた枯淡な趣。

5 三昧境 ものごとに没頭している忘我の境地。

6 尾上 兵庫県加古川市の加古川河口東岸の地名。尾上神社境内の松で知られる。歌枕の一つ。

7 漱石先生 夏目漱石(なつめ)。一八六ページ参照。『草枕』は一九〇六年発表の作品。

4 「瞑想的」とはどのようなことか。

そううまくない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。けだし料理の色合いはどこの国でも食器の色や壁の色と調和するように工夫されているのであろうが、日本料理は明るい所で白っちゃけた器で食べてはたしかに食欲が半減する。たとえばわれわれが毎朝食べる赤味噌の汁なども、あの色を考えると、昔の薄暗い家の中で発達したものであることが分かる。私はある茶会に呼ばれて味噌汁を出されたことがあったが、いつもはなんでもなく食べていたあのどろどろの赤土色をした汁が、おぼつかない蠟燭の明かりの下で、黒漆の椀によどんでいるのを見ると、実に深みのある、うまそうな色をしているのであった。そのほか醤油などにしても、上方では刺し身や漬

神戸市東灘区にある、谷崎潤一郎の旧邸「倚松庵」外観（上）と内部（下）

〈合奏〉〈賛美〉
＊無我の境

物やおひたしには濃い口の「たまり」を使うが、あのねっとりとしたつやのある汁がいかに陰翳に富み、闇と調和することか。また白味噌や、豆腐や、蒲鉾や、とろろ汁や、白身の刺し身や、ああいう白い肌のものも、周囲を明るくしたのでは色が引き立たない。第一飯にしてからが、ぴかぴか光る黒塗りの飯櫃に入れられて、暗い所に置かれているほうが、見ても美しく、食欲をも刺激する。あの、炊きたての真っ白な飯が、ぱっと蓋を取った下から温かそうな湯気を吐きながら黒い器に盛り上がって、一粒一粒真珠のようにかがやいているのを見る時、日本人ならだれしも米の飯のありがたさを感じるであろう。かく考えてくると、われわれの料理が常に陰翳を基調とし、闇というものと切っても切れない関係にあることを知るのである。

―〈基調〉

谷崎潤一郎　一八八六（明治一九）―一九六五（昭和四〇）年。小説家。東京都に生まれた。耽美的世界を描いて文名を得たが、関西移住後は古典文化にも傾倒した。作品に『刺青』『春琴抄』『細雪』などがあるほか、『源氏物語』の現代語訳がある。この文章は一九三三年に発表されたもので、本文は「谷崎潤一郎全集」第二〇巻によった。

自己ＰＲ文のためのメモ

年　組　名前

・**体験**……これまでの体験から、自分の中核に関わることで、印象に残っていることを挙げよう。

・**分析**……なぜ印象に残っているのか、考えてみよう。体験を別の角度から考えて、少し想像をまじえながら生かす工夫を考察してみよう。

・**個性の言語化**……自分の性格やタイプを分類し、その性格をどのように捉えているか、能動的な要素をちりばめて書いてみよう。

私の個性は

である。

その個性を私は

と考えている。